

母親役割の段階的变化と子育て肯定感
ー子どもの生活自立と学業達成への期待と促進行動に着目してー

花形 美緒

Gradual Changes in the Role of Mothers and Positive Child-rearing Feelings:
Focusing on Expectations and Behaviors to Promote
Children's Life Independence and Academic Achievement

Mio HANAGATA

目次

I.研究の背景

II.目的

III.方法

IV.結果

1. 記述統計
2. 子どもに期待していること
3. 子どもへの期待と促進行動
 - 3-1. 生活自立
 - 3-2. 勉強
 - 3-3. 習い事
4. 相関関係
5. パス解析
 - 5-1. 未就学児をもつ親
 - 5-2. 小学生の子どもをもつ親
 - 5-3. 中学生の子どもをもつ親
 - 5-4. 高校生以上の子どもをもつ親

V.考察

I.研究の背景

現代の母親たちは、職場や家庭、そして子どもの学校などにおいても、多くの役割を担っている。働く母親は役割多重による疲労を感じている一方で、独身女性や専業主婦よりも日々の生活に満足している（土肥ら, 1990）という研究結果がある反面、「ゆっくり子どもと関わるができない」「子ども

もの世話のために職場に迷惑をかけている」という子どもや職場への罪悪感が高まる（濱田, 2005）ということも指摘されている。

多様化するライフコースにおいて母親たちが自身の役割をどのように認識し、どのような行為を選択することが自らの子育てに肯定的になるのか、明らかにしていく必

要がある。

特に子育ては子どもの成長に対して母親の役割が変化し、それに伴う葛藤が示されている（花形，2018）が、子どもの学齢別に母親役割としての子どもへの関わり方がどのように変化していくのかを段階的に明らかにした研究はほとんどない。

母親役割

日本における子育ての特徴としては、幼児期の育児が母親に大きく依存している（田間，2022）ことであり、母親の役割は多岐にわたる。及川（2014）が母親の役割を「自己をどのように位置づけどのように行為すべきかという行動予測をもって育児行為をすることによって取得される」としたように、母親たちは日々の生活の中で、子どもにとって何が最良かを考え問いながら行動し、そしてその行為と子どもの生活という相互関係の中で役割を取得していくと捉える必要がある。

寺園・山口（2015）は、子育て期母親役割の尺度を検討し、「子どもの発達を促すかわり」「基本的生活習慣の確立に向けての援助」「社会生活に向けての教育」「子育てや教育に関する費用の管理」の4因子を示した。家庭内での生活にとどまらず、社会性を身に付けるために教育することも親の役割という認識は、多くの人が頷ける部分であろう。そうしたしつけや子どもの社会化としての家庭教育と、家庭での学習や子どもの地位達成（天童・多賀，2016）が母親の役割として求められ、母親の担う家庭での「教育」役割も多いことがわかる。教育という言葉も非常に広義であり、母親たちは子どもへの学習促進に加えて、子どもの学習環境の選択や手配等に関わり続けることな

ど学業に付随した役割も多くあること（花形，2018）が示されている。

教育期待

鳶島（2020）によると、母親の期待が父親の期待よりも子どもの大学進学期待と強く関連しており、母親の家庭内における教育役割の影響を示しているといえる。しかし同時に母親たちには「教育責任の増大」による葛藤が生じており、それは責任感と父親の関与の少なさによる（額賀・藤田，2021）ことが指摘されている。子育てのワンオペが問題視される中で、子どもへの教育という役割の舵も母親たちが一人で操縦している姿が浮かび上がる。

ベネッセ教育総合研究所の行った調査（2022）によると、ワーク（子ども向け「ワーク」や「学習用ドリル」）を「ほとんど毎日」行う幼稚園児は21.7%であり、週3～4回と週1～2回の回答と合わせると実に60.1%の幼児が家庭でワークに取り組んでいるという結果である。花形（2018）は、母親が家事を促進し子どもがそれを遂行した結果、母親の子育て肯定感が高まることを示したが、同様に学習を促進し子どもがそれを実践した場合も母親の子育て肯定感が高まるのではないだろうか。

さらに同調査によると、約6割の幼児が就学前から習い事を行っている（ベネッセ教育総合研究所，2022）。小学校時代の習い事、そして中学以降の部活動なども含めるとスポーツや芸術系の習い事は費用や送迎の時間など親にかかる負担は大きいが、親が子どもに期待し求めているものも大きいことがうかがえる。そうした親の期待と、子どもの実践も、母親の子育て肯定感に関係するのではないかと考えられる。習い事に

については、親が支配的な行動をとることによって子どものモチベーションを下げる（藤後ほか，2017）ことが明らかになっており、期待することとその促進行動が子どもの実践にどのように影響するのかも明らかにする必要がある。

子育て肯定感

子どもを育てるということは自らの選択の先にあるものであり、子育てを選択しない人も多い現代においては、育児への価値観は多様化しているといえる。そうしたことが現代特有のストレスや葛藤を生み出している（柏木，2003）といえる。若本（2013）は、「子育て・育児に対する脅迫性」は自分の子育てに対する自己・他者の評価を懸念することから生じるとし、完璧な子育てをしなければという不安焦燥や子育てがうまくできないことによる落胆は「よい母親ではない」と母親としての自信を奪うと指摘する。これは子どもの学業達成、習い事における成績などが他者からの評価につながり、母親の子育てとしての自己効力感に影響すると考えることができよう。しかしながらそこには「結果」だけではなく、子どもとの相互行為としての「過程」が重要となる。つまり母親が子どもに促すという母親役割を遂行し、子どもが実践した場合に母親の自己肯定感が高められるというのではないだろうか。

子育て中の育児肯定感については、乳幼児期の子どもをもつ母親の研究は見受けられるものの、子どもの成長とともにあまり検討されておらず、母親が子育てにおいてその役割を遂行した後どのように肯定感が高まるのかは明らかにされていない。

II.目的

そこで本研究では、子育てを通した母親役割のうち「子どもの生活自立」と「子どもの学業」「子どもの習い事」を促進する役割に着目し、役割遂行において母親たちが自身の役割の比重をどのように変化させていくのか、子どもの学齢期ごとに段階的にどのような変化をたどるのかを示す。

「子どもに生活自立を促す」「子どもに学習を促す」「子どもに習い事などを促す」という母親役割について、母親がどのような比重を理想として役割を遂行するのかを明らかにし、母親役割比重としての子どもへの期待や促進行動と、子どもの実践が母親の子育て肯定感に与える影響を示すことを目的とする。

III.方法

調査は、2022年1月に同居の子どもを持つ母親を対象として Web アンケート調査を実施した。調査会社の登録モニターのうち、子どもの学齢別（第一子が未就学・小学生・中学生・高校生以上）で母親の就業割合別に抽出された 800 名を対象とした。

調査内容は、子ども数、子どもの性別、母親の就業形態等の属性項目、母親から子どもへの生活自立・習い事・家事促進行動、母親の教育関心、母親の期待する子どもの生活自立と学習そして習い事の割合、母親の子育て肯定感などである。分析には SPSS Statistics28、Amos28 を使用した。

IV.結果

1. 記述統計

分析に使用した変数の記述統計は表 1 に示す通りである。

表 1 分析に使用した変数の記述統計

	範囲	%	平均値	標準偏差	
母親年齢	24~58		43.41	6.601	
母親就業	1(フルタイム)	30.1	2.05	0.805	
	2(パート)	35.1			
	3(専業主婦)	34.8			
母親学歴	1	0.5	3.32	0.912	
	2	20.9			
	3	31.8			
	4	42			
	5	3.1			
	6	1.8			
親同居 (ダミー変数)	1 (同居)	12.8	0.13	0.334	
	0 (別居)	87.3			
長子学齢	未就学児	25.0	4.25	1.698	
	小学生	25.0			
	中学生	25.0			
	高校生以上	25.0			
長子性別 (ダミー変数)	1 (男子)	50.0	0.50	0.500	
	0 (女子)	50.0			
同居子数	1~4		1.64	0.688	Cronbach α
家事頻度 (尺度)	7~30		25.28	3.967	.709
子ども関わり (尺度)	9~28		21.58	4.867	.750
生活時間 (尺度)	10~48		26.592	4.6822	.789
サービス利用 (尺度)	4~18		4.17	1.025	.771
教育関心	1~5		4.14	0.698	
生活自立促進 (尺度)	5~20		13.32	3.437	.783
勉強促進 (尺度)	10~25		15.08	4.652	.773
習い事促進 (尺度)	4~12		5.52	2.107	.791
生活自立実践 (尺度)	12~60		35.31	10.135	.856
勉強実践 (尺度)	5~30		16.44	5.848	.646
習い事実践 (尺度)	2~12		5.13	2.988	.804
子育て肯定感 (尺度)	10~40		28.38	5.049	.761
期待する割合：自立	0~10		4.95	1.984	
期待する割合：勉強	0~10		3.78	1.840	
期待する割合：習い事	0~10		1.27	1.206	

母親の年齢は 24 歳～58 歳である。就業形態はフルタイム・パートタイム・専業主婦の比較を行うために全て 30% 台となっている。学歴は 4「大学」が 42% と一番多く、次いで 3「短期大学・高等専門学校」が 31.8% であった。長子学齢とその性別はそれぞれ分析のために同比率となるようにモニター依頼を行っている。親との同居は 12.8% で

あり、令和 2 年国勢調査 (2020) で示された、2020 年における三世帯世帯割合の数値 9.4% よりはやや高い。同居子数は 1～4 人、平均 1.64 人で、既に自立した子どもや下宿中の子ども数は含まれない。

家事頻度については、母親自身の「食事の用意」「食事の後片付け」「食料品や日用品の買い物」「洗濯」「部屋の掃除」「風呂の掃除」

の6項目の頻度について「ほぼ毎日」から「ほとんど行わない」の5件法で尋ねた。選択肢にそれぞれ5～1点を与えて足し合わせ「家事頻度(尺度)」としたところ、6～30点を取り得るが、回答は7点から30点の範囲であり、全ての家事を「ほとんど行わない」という回答はみられなかった。平均は25.28点であり、子どもが手伝いとして分担し完了させることが多い「風呂掃除」以外は、ほぼ毎日行っているという回答が、平均値と重なることが示された(Cronbach's $\alpha = .709$)。

子ども関わりとして「朝、子どもを起こす」「送り迎えをする(幼稚園、保育園、習い事、塾など)」「子どもの話(その日の出来事など)を聞く」「夕食を一緒に食べる(食べさせる)」「宿題や勉強をみる、または本の読み聞かせをさせる」「子どもを寝かしつける、または子どもが寝るまで起きている」「一緒に遊んだり、趣味やスポーツをする」の7項目について「週に4回以上」から「ほとんど行わない」の4件法で尋ね、それぞれ頻度の高い4点から頻度の低い1点までを与えて足し合わせたところ、平均は21.58点となった(Cronbach's $\alpha = .750$)。

生活時間については、「あなたは以下の時間について、どのようにしたいと思いますか」として「子どもといる時間」「子どもの勉強をみる／本の読み聞かせをする時間」「子どものために何かを手作りする時間」「料理をする時間」「掃除をする時間」「仕事をする時間」「自分の自由な時間」「睡眠時間」「夫と過ごす時間」「地域活動をする時間(町内会やPTA、父母会活動など)」の10項目について「もっと増やしたい」から「もっと減らしたい」までの5件法で尋ね

た。子どもの学齢によって若干回答にばらつきがみられるものの、「減らしたい」という回答が多かったのは順に「地域活動」「仕事」「夫と過ごす時間」という結果であった。全体として「増やしたい」から「今のままでよい」という回答がほとんどであった。「増やしたい」という回答が多かったものは順に「自由な時間」「睡眠時間」であったが、各項目間に有意な差はみられなかった。尺度得点は、点数が高いほど生活時間を「減らしたい」と思っている項目が多いことになる(Cronbach's $\alpha = .789$)。

現在のサービス利用として、「ベビーシッター」「ファミリーサポートセンター」「掃除サービス」「調理済みの食事の宅配サービス」「食材の宅配サービス」について、「週3程度」から「利用しない」までで尋ねた。ベビーシッターやファミリーサポートセンターについては対象年齢もあるため、未就学児と小学校低学年以外での利用はみられなかった。全体として利用がみられたのは「食材の宅配サービス」のみであった(Cronbach's $\alpha = .771$)。

教育関心については、「あなたはふだん、お子さんの教育にどの程度関心をお持ちですか」と尋ねた。「かなり関心を持っている」の5点から「ほとんど関心を持っていない」の2点と「わからない」の1点までで算出した。結果、平均が4.14点と「かなり」「ある程度」関心があるという回答が多かった。

生活自立、勉強、習い事の促進及び子どもの実践に関して作成した尺度の項目及び信頼度については、以下の分析時にそれぞれ記載する。

2. 子どもに期待していること

「あなたは、同居のお子さんのうち、一番

上の年齢のお子さんに対して、家事などができるようになることと、勉強をする・できるようになること、それ以外の習い事などの上達にどのくらいの割合で期待をしていますか。足して10になる整数でお答えください。」として、「生活自立：家事・自分のことが自分でできるようになる」「勉強：勉強をする・できるようになる」「習い事：その他習い事などの上達」の3項目について尋

ねた。

それぞれ0～10の値を取り得るが、表1の通り、「生活自立」の平均は4.95と子どもに期待することの半分以上を占めていることがわかる。次いで「勉強」は3.78、「習い事」は1.27という値であった。

これを子どもの学齢別、性別にしたものが図1である。

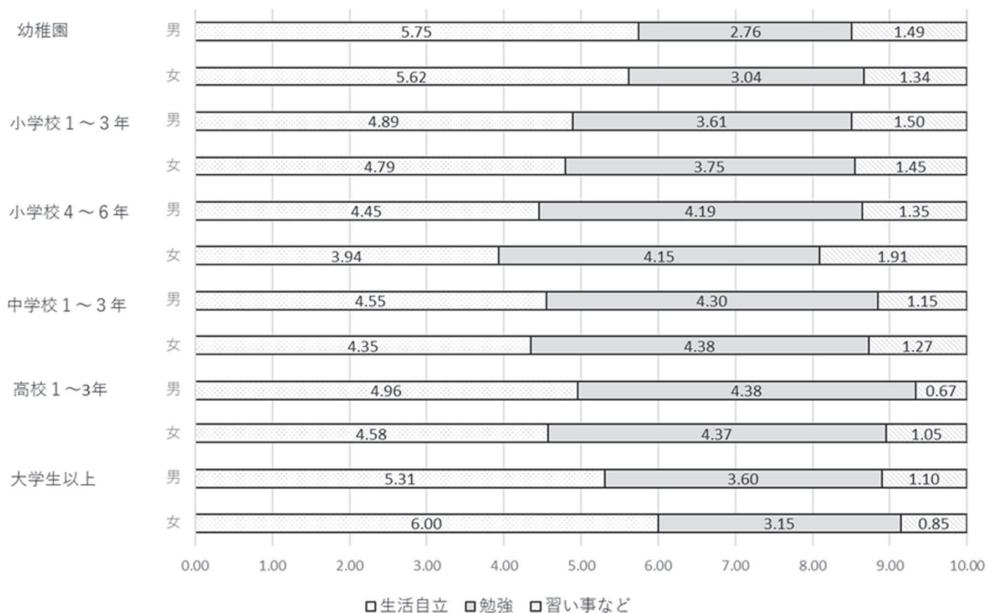


図1 子どもに期待する割合 生活自立：勉強：習い事など

ここから、全体としては「生活自立」を求める割合が一番高く、特に就学前・小学校1～3年生は男女差がないことがみてとれる。小学校4～6年生と中学校1～3年生の女子のみ、「勉強」の割合が高くなっていること、一度ゆるやかに減少した「生活自立」への期待が大学生以上で増加し、その際には女子

に求める割合のほうが高くなっていることも明らかになった。

3. 子どもへの期待と促進行動

では、その期待する割合に応じて、母親たちは「促進行動」をどの程度行っているのだろうか。子どもに日々どのくらい促す行動

をとっているのかを尋ねた。

3 - 1. 生活自立

生活自立については「食事の準備や片付け（火を使わないもの）」「料理（火や包丁を使うもの）」「洗濯（靴下や下着の下洗いを含む）」「掃除」「子ども自身の身支度」の5項目について「積極的にさせる」から「させない」の4件法でたずね、それぞれに4～1点を与えて足し合わせた。結果を「生活自立促進（尺度）」とする。合計点は5点から20点を取り得るが、表1にみられるように平均は13.32点、尺度の信頼度を表す

Cronbach's α は本研究では $\alpha = .783$ であった。

この生活自立促進尺度の点数と、2で示した「期待する割合」の関係をみていきたい。0～10の期待する割合のうち、生活自立を10としている母親が、より子どもに生活自立を促しているのかということ、そうではないという結果が得られた（図2）。このことから、母親の生活自立への期待割合と促進行動に関係性は見られないことが明らかになった。

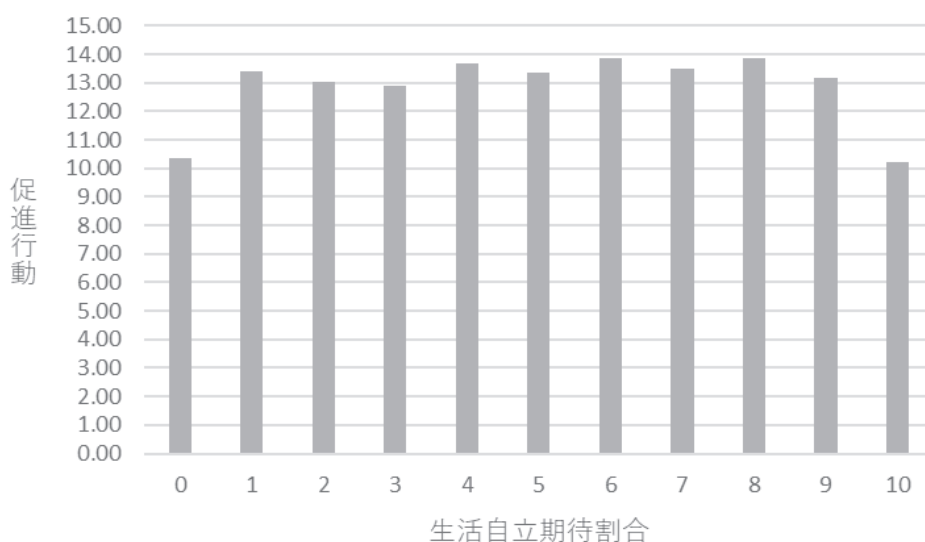


図2 子どもに生活自立を期待する割合とその促進行動

3 - 2. 勉強

勉強については、第一子が未就学児の場合と高校生以上の場合で大きく異なる働きかけが予想されたため、「以下の行動をどのくらいとりますか。一番近いものを1つお

選びください。お子さんが小さくてまだできない場合、「一度もしたことがない」を選んでください。」として、「学校の宿題をしたか尋ねる、あるいは宿題をするように言う」「通信教材やドリルなどの教材で勉強する

ように言う」「塾（幼児教育、学習塾、進学塾など）の準備をする」「塾の宿題をするように言う」「本（雑誌や漫画を除く）を読むように言う」の5項目について「一度もしたことがない」から「ほぼ毎日」の5件法でたずね、それぞれに1～5点を与えて「勉強促進（尺度）」とした（Cronbach's $\alpha = .773$ ）。

この勉強促進尺度の点数と、「勉強に期待する割合」の関係は、図3のようになった。「勉強に期待する割合」が0～6では、期待割合が上がるほど、勉強を促す促進行動が増加していることが明らかになった。しかしながら、この関係性は勉強への期待割合が比較的高い7～10のところでは見られなかった。

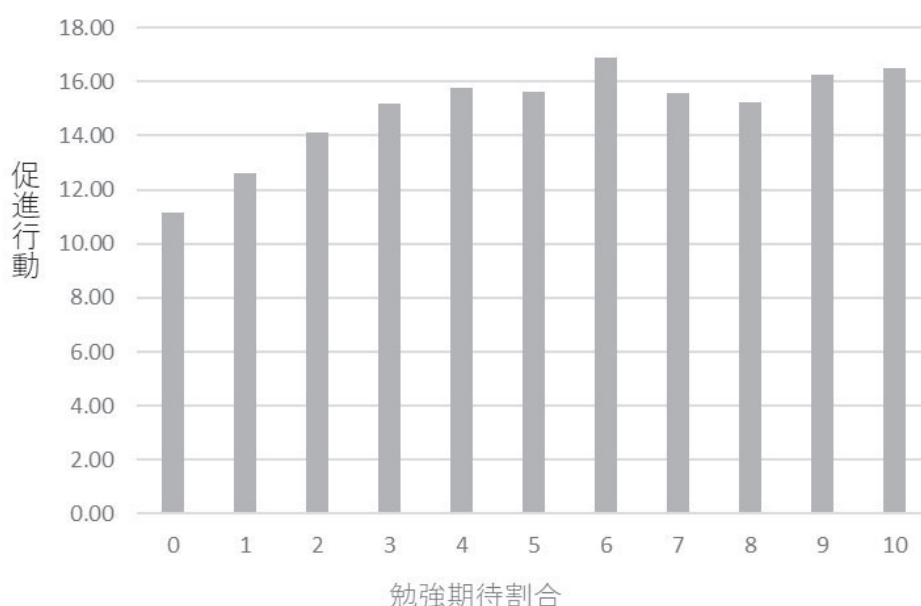


図3 子どもに勉強を期待する割合とその促進行動

3-3. 習い事

習い事については、「習い事（芸術・スポーツなど）に通わせる」「習い事の練習をするように言う」「練習をしないことを叱ったり注意したりする」の3項目について、「一度もしたことがない」～「ほぼ毎日」の5件

法でたずね、それぞれに1～5点を与えて足し合わせ、「習い事促進（尺度）」とした（Cronbach's $\alpha = .791$ ）。

この習い事促進尺度と、「習い事に期待する割合」の関係は図4に示す通りである。

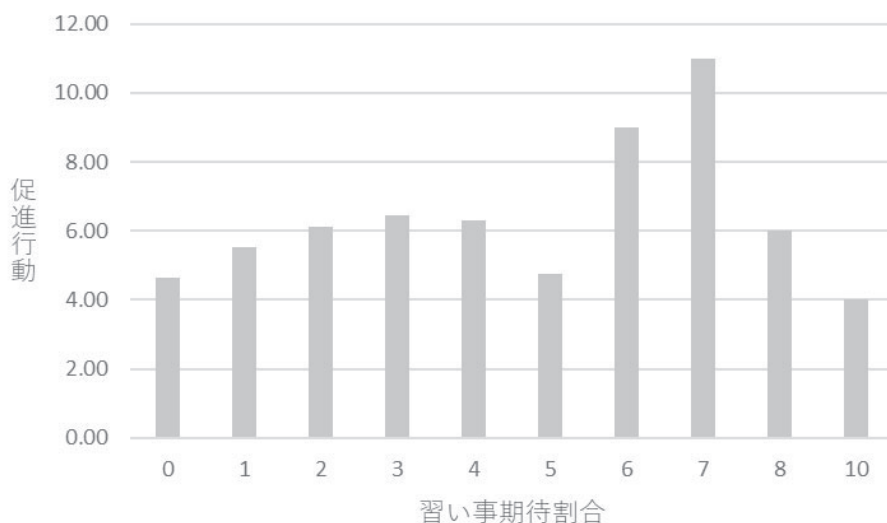


図4 子どもに習い事で期待する割合と促進行動

「習い事に期待する割合」は、全学齢の男女ともに生活自立・勉強・習い事の3つの中で一番低く、全体として期待割合が少ないなかで、子どもに期待する割合を10分の6以上と回答している母親もみられる。特に6、7割という回答の母親は習い事への促進行動も高いという結果がみられた。しかしながら期待割合と促進行動は正の相関が

みられるわけではなく、8や10の回答の母親では促進行動は減少するという結果が明らかになった。

4. 相関関係

次に、使用変数の相関関係をみていくことにする。分析に使用した変数及び尺度の相関係数は表2に示す通りである。

表2 分析に使用した変数の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
1. 母親年齢																			
2. 母親就業	.010																		
3. 母親学歴	-.008	-.134 ***																	
4. 親同居ゲーム	-.026	-.059	-.026																
5. 子年齢	.670 ***	.075 *	-.118 **	-.028															
6. 子性別	.008	-.005	-.029	-.015	.019														
7. 同居子数	-.244 ***	.028	-.031	.106 **	.037	.076 *													
8. 家事頻度	-.046	.292 ***	-.048	-.050	.052	.021	.110 **												
9. 子ども関わり	-.564 ***	-.023	.133 ***	.052	-.704 ***	-.075 *	.199 ***	.124 ***											
10. 生活時間	.257 ***	.182 ***	-.061	-.048	.294 ***	-.012	-.082 *	-.001	-.305 ***										
11. サービス利用	-.083 *	-.042	-.007	.023	-.081 *	-.023	.049	-.017	.095 **	-.192 ***									
12. 教育関心	.133 ***	-.005	.174 ***	.001	.057	.014	-.012	.117 **	.103 **	-.117 **	-.014								
13. 生活自立促進	.093 **	-.087 *	.013	.030	.185 ***	-.072 *	.080 *	.049	-.050	-.132 ***	.083 *	.155 ***							
14. 勉強促進	.089 *	.007	.056	.047	.020	.015	-.003	.106 **	.120 **	-.043	.126 ***	.176 ***	.137 ***						
15. 習い事促進	-.038	-.068	.093 **	.084 *	-.128 ***	-.014	.052	.049	.220 ***	-.109 **	.143 ***	.084 *	.073 *	.556 ***					
16. 子生活自立実践	.221 ***	-.025	-.065	.001	.368 ***	-.110 **	.106 **	.068	-.214 ***	-.004	.099 **	.095 **	.614 ***	.101 **	.024				
17. 子勉強実践	.215 ***	.040	.057	.029	.248 ***	-.075 *	.014	.084 *	-.048	.043	.074 *	.286 ***	.280 ***	.563 ***	.256 ***	.282 ***			
18. 習い事実践	-.007	-.068	.143 ***	.042	-.072 *	-.087 *	.066	.019	.191 ***	-.095 **	.109 **	.151 ***	.164 ***	.359 ***	.681 ***	.113 **	.371 ***		
19. 子育て肯定感	.081 *	-.134 ***	.084 **	-.019	.107 **	.023	-.025	-.069	-.066	-.071 *	-.034	.162 ***	.108 **	-.115 **	-.094 **	.087 *	.118 **	.011	

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

母親の年齢と子どもの学齢、子ども関わりにはかなりの相関がみられた。今回は特に第一子について尋ねているため、母親の年齢が若いほど、子どもがまだ幼く子どもとの関わりが多いこと、母親の年齢が高い場合は子どもも大きく、子どもとの関わりが少ないことがわかる。

母親の就業形態と家事頻度や生活時間にも正の相関がみられ、フルタイム勤務の母親よりも専業主婦の母親のほうが家事頻度は高く、家事や育児などの生活時間をもっと減らしたいと回答する傾向がみられた。子どもの学齢と生活時間においても、子どもが大きくなるにつれて生活時間をもっと減らしたいという回答傾向があり、子どもが小さい場合にはもっとしたい、増やしたいという回答傾向がみられた。これらの関

係性から、子どもが幼く就業している母親ほど、子どもとの時間や家事にもっと時間をかけたいと思っており、時間的余裕がない状況が浮き彫りとなってくる。

また母親の年齢と学歴が高いほど教育関心が高いという正の相関も示された。教育関心が高い母親ほど、生活自立や勉強、習い事を子どもに促すという相関関係もみとれる。子どもへの促進行動と子どもの実践には全体的に正の相関がみられ、母親が声をかけ促すほど子どもが実践するという関係が示された一方で、母親からの勉強と習い事の促進行動と、子育て肯定感にはやや弱い負の相関関係が示され、日々子どもに「勉強しなさい」「練習しなさい」と促す母親は、自分自身の子育ての現状にあまり肯定的ではないということがみえてきた。

5. パス解析

最後に、母親の子育て肯定感を従属変数としたパス解析を行う。本研究における調査は一時点のものであり、同一の子どもを追ったものではないため、単純に比較をすることはできないが、子どもの学齢別の母親の子育て肯定感に影響を与える要因を示すことで、それぞれの子どもの発達段階における母親の役割と子育て肯定感の関係性を描き出すために、「未就学児」「小学生」「中学生」「高校生以上」の学齢に分けてそれぞれパス解析を行った。

最終的な従属変数となる「子育て肯定感」は、「子どもを育てるのは楽しいと思う」「毎日、育児の繰り返しばかりで、社会とのつながりが切れてしまうように感じる」「子どもの成長が楽しみだと感じる」「子どもを育てるために我慢ばかりしている」「子どもを育てることは、有意義で素晴らしいことだと思う」「自分一人だけで子育てしているような気がする」「子どもに時間を取られて、自分のやりたいことができる、イライラする」「子どもを育てることによって、自分も成長しているのだと感じる」の8項目に対し

て「よくある・とてもそう思う」から「全くない・全くそう思わない」までの5件法で尋ねた。逆転項目を整えて5点から1点を与えて足し合わせたところ、8点から40点を取り得るところ、10点から40点の回答が得られ、平均点は28.38点であった(Cronbach's $\alpha = .761$)。得点が高いほど、自分の子育ての現状に肯定的であると捉える尺度である。なお、パス解析にはそれぞれの変数を全投入したが、有意なもののみパスで示すこととする。正の関係がみられたものは実線で、負の関係がみられたものは点線で記した。母親の属性等の変数として母親の年齢、母親の就業、母親の学歴、親同居が有意な際は左上からの矢印で記載し、子どもに関わる変数として子どもの性別と子ども数は左下からの矢印で記載した。

5-1.未就学児をもつ親

未就学児の子どもをもつ母親の子育て肯定感(平均値27.890 標準偏差5.28)には、子どもの生活自立、勉強実践、習い事の実践からの影響はみられなかった(図5)。

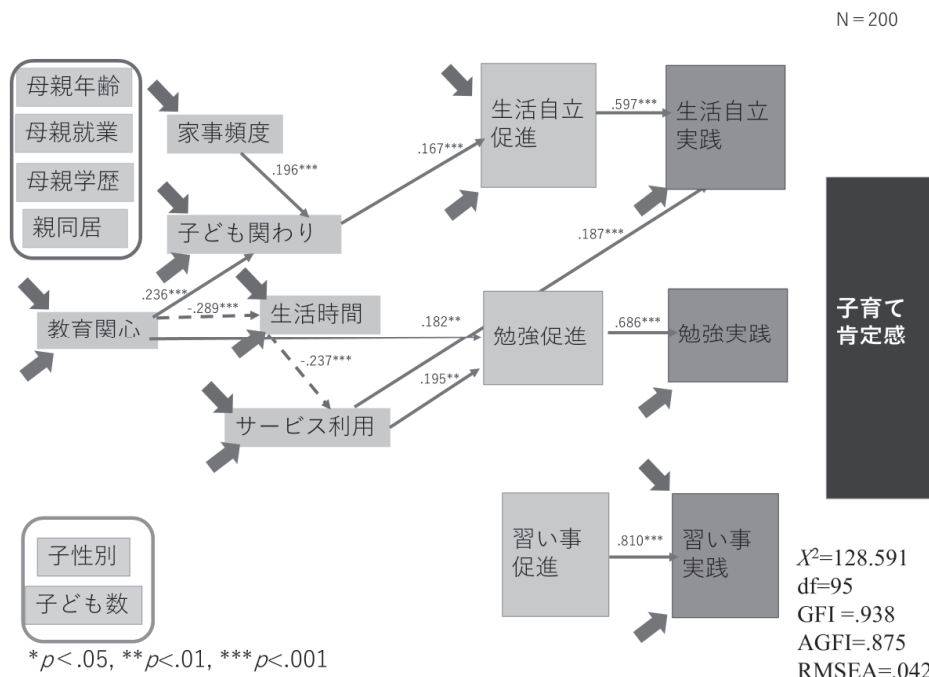


図5 未就学児の子どもをもつ母親 子育て肯定感に影響を与える要因 パス解析結果

教育関心の高い母親は子どもとの関わりが多く、子どもの生活自立を促進し、実際に子どもの生活自立実践も高いことが示された。また教育関心が高い母親は子どもに勉強を促進し、実践度も高いことが明らかになった。母親が就業しており、また子ども数が多い場合に様々なサービスを利用していること、そしてそのサービス利用の高い母親ほど子どもの生活自立実践が高く、母親の勉強促進が高いことが示された。このことから、有業で子ども数が多いなど時間的制約の多い母親は、有料サービスを使用し時間を確保した分を子どもに期待する生活自立や勉強を促進する時間にあてているこ

とが推察できる。

5-2. 小学生の子どもをもつ親

小学生の子どもをもつ母親の子育て肯定感(平均値 27.755 標準偏差 4.827)には、子どもの生活自立、勉強実践、習い事の実践からの影響はみられなかった(図6)。唯一「教育関心」からはパスがひかれ、教育関心が高い母親は子育て肯定感が高いことが明らかになった。これは、小学校入学後は家庭学習(宿題)なども増えるために、それを見る、一緒に勉強するという時間が子育てへの肯定感を高めているのだと考えられる。

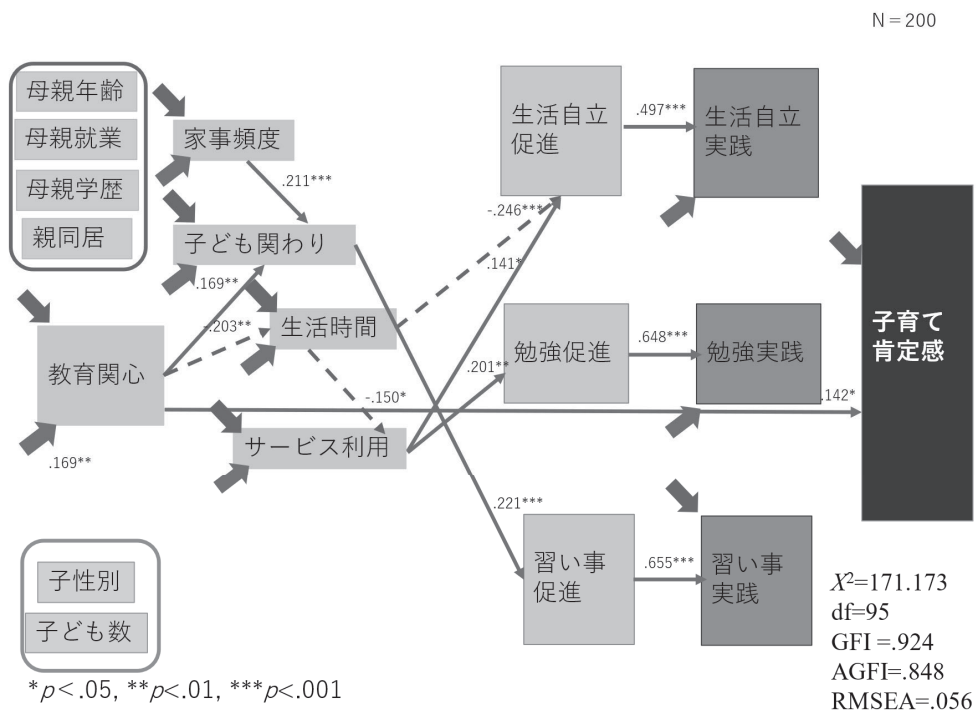


図6 小学生の子どもをもつ母親 子育て肯定感に影響を与える要因 パス解析結果

小学生の子どもを持つ母親の特徴として、「生活時間」から「子どもの生活自立促進」へ負のパスがひかれているのも特徴的である。これは、忙しく生活時間が足りないと考える母親が、子どもに家事など生活自立を促さないという結果であるが、子どもにやらせるとかえって時間がかかり手間と感じられることがうかがえる。

また、小学生の子どもがいる母親の分析結果では「子ども関わり」から「習い事促進」へのパスがひけたことも特徴的である。習い事への送迎、宿題や練習などのつきそいなど、小学生の習い事には親の参加が不可欠であり、その関わりや促進行動が子ども

の習い事実践につながっていることが示された。しかしながら子どもが習い事で結果を残すことが母親の「子育て肯定感」に直結する影響はみられず、結果ではなく過程の部分を重視するのではないかと推察される。

5-3. 中学生の子どもをもつ親

中学生の子どもをもつ母親の子育て肯定感(平均 28.790 標準偏差 5.128)には、教育関心と子どもの勉強実践からの直接的なパスをひくことができた(図7)。また、「子ども関わり」からはマイナスのパスが有意な結果として示せた。

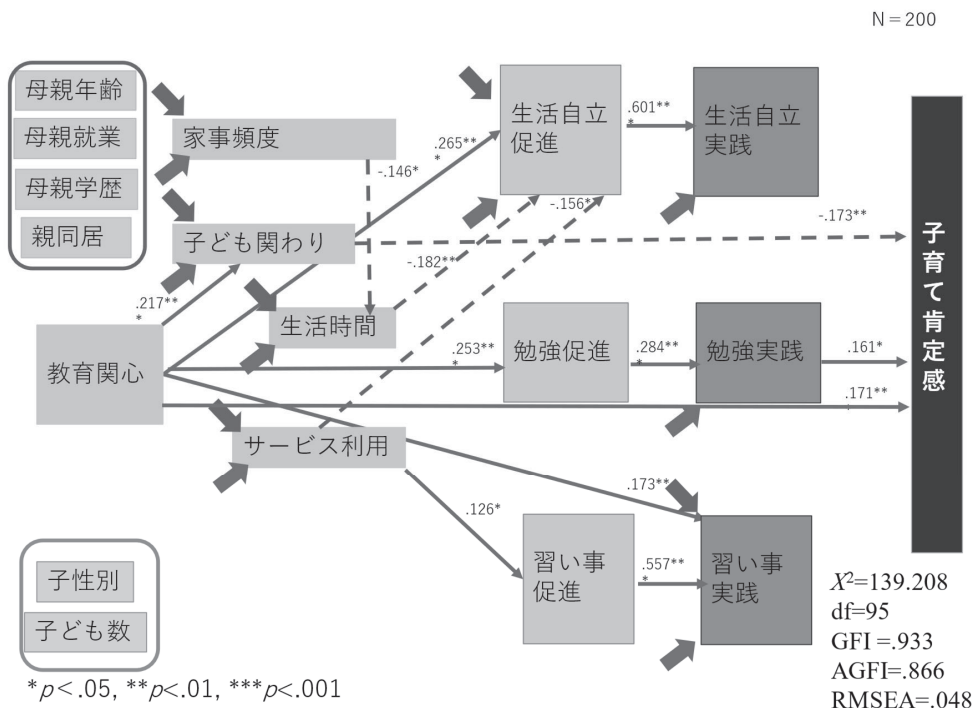


図7 中学生の子どもをもつ母親 子育て肯定感に影響を与える要因 パス解析結果

教育関心の高い親は、子どもの生活自立、勉強、習い事などの3つ全てにおいて促進行動が高いという結果がみられ、それぞれ促している場合には子どもが実践していると感じていることが明らかになった。しかしながら母親が促して子どもが実践した結果として子育て肯定感に直結するのは勉強実践のみであり、子どもの生活自立や習い事の実践は有意な値が得られなかった。

様々なサービスを利用している母親は子どもの生活自立を促してはならず、外部サービスは自分自身の時間確保と同時に子どもの時間も他に使うために利用し、子どもに「(家事を)しなさい」と言わなくて済むように利用していることもうかがえる。

子ども関わりが低いほうが子育て肯定感が高まるというのは、他の学齢の分析ではみられなかった結果である。中学生という思春期の子どもとの距離感を適宜保ち、あまり手がかからなくなったと感じているほど、自分自身のこれまでの子育ての結果として良好な関係が保てていると感じることにつながるのであろう。

5 - 4. 高校生以上の子どもをもつ親

高校生以上の子どもをもつ母親の子育て肯定感 (平均 29.090 標準偏差 4.848) には子どもの勉強実践が有意な影響を与えていた (図8)。

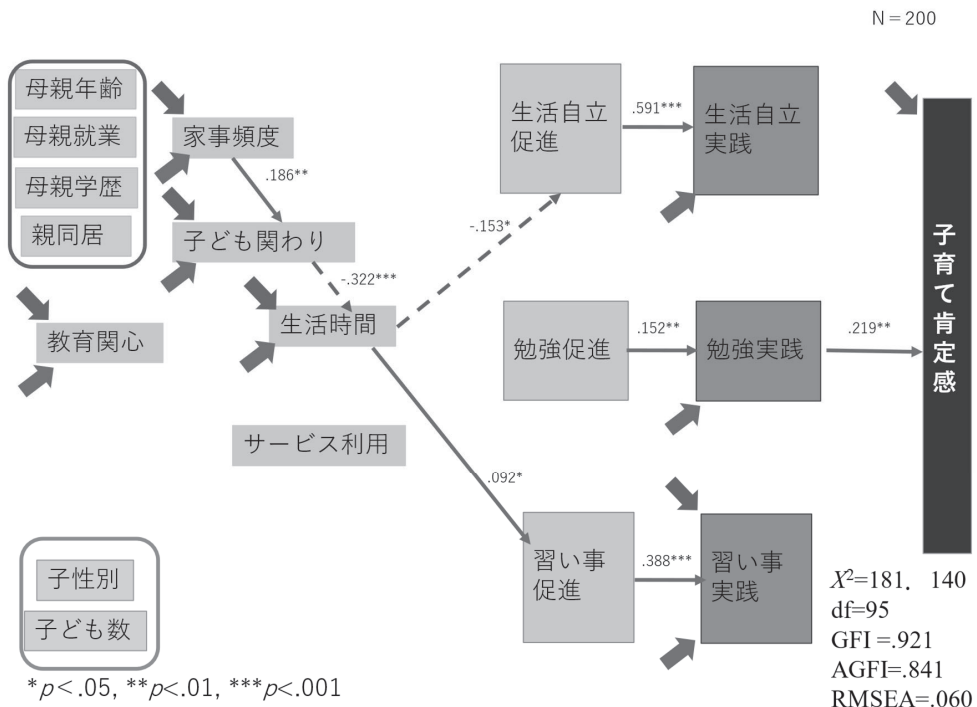


図8 高校生以上の子どもをもつ母親 子育て肯定感に影響を与える要因 パス解析結果

生活自立、勉強、習い事の全てにおいて、母親からの促進行動とそれぞれの子どもの実践には有意な正のパスがひけたことから、子どもは高校生以上であっても母親からの働きかけで行動を起こすことがうかがえる。ここでは高校生以上として大学生の子どもをもつ母親も合わせて検討しているため、モデルについては、 $GFI=.921$ 、 $AGFI=.841$ 、 $RMSEA=.060$ とあまりあてはまりが良くいと言えなかった。子どもが高校生や大学生となると、家事や勉強、習い事をするということ以外の要素が母親の子育て肯定感に影響すること、そして子どもの成長に伴いこれまでの思いが蓄積していることも推察される。

V.考察

以上みてきた結果をまとめ、母親役割の段階的変化という視点で考察を行いたい。

結果IVの2で示した通り、子どもの学齢ごとに、子どもに期待する「生活自立」：「勉強」：「習い事」の割合は異なり、未就学児では生活自立が高く、その後小・中・高校生では勉強に期待する割合が増加していた。このことは、子どもの成長とともにできることが増えていき、母親からの期待のハードルは性別や学齢に応じて変化するということが考えられる。特に小学校高学年(小学校4～6年)の女子は「生活自立」への期待が「勉強」よりも低いという特徴がみられた。この時期の女兒は、自分自身の身の回りの

ことや家事手伝いなど、求められる生活自立を十分達成しているとも考えられる。そのため、その分継続している習い事の練習等に期待する比率が上昇する。習い事の継続期間との関連として、ベネッセの調査（2024）では、「小6から中1（小中接続）の段階で習い事率は大きく低下」するということが明らかになっており、小学生のうちに習い事を十分に行い、中学進学以降は部活動や勉強にシフトするという傾向がうかがえる。

大学生以上になると再度「生活自立」への期待割合が増加する。これは、学生の身分ではあるものの18歳成人を迎え、家族員の中でも大人として家事を分担することが求められるためではないだろうか。また生活リズムも、大学の授業履修にもよるが、毎日同じ起床時間ではなくなるなどこれまでの生活と変わってくるため、自分のことは自分でという生活自立への期待が強まることが考えられる。

次にIVの3で示した子どもへの期待割合と母親からの促進行動について考察したい。生活自立、勉強、習い事などの全てにおいて、子どもに期待する割合が高い場合に必ずしも多くの促進行動をするというわけではない、という結果がみられた。

生活自立については、0（全く期待していない）と10（自分自身のことや家事をすることのみに期待）以外は母親からの促進行動に有意な差がみられなかった。「0」として、未就学児でできない、受験生など他のことに集中してもらいたいなど期待していない場合は促進行動が控えられることは想像に難くない。一方「10」の場合は、親から言われて行動に移すだけではなく、子ども自

身の内発的動機付けに期待していることもあるのではないかと考えられる。

これは習い事にも同様のことが言えると考えられ、習い事への期待が「8」「10」という高い割合の母親は、促進行動をあまりとっていないという結果であった。中村ら（2022）の調査によると、成績上位群の学習動機付けアンケートは、成績下位群と比較して内発的動機付けの項目が有意に高値となっている。このことと同様に、母親たちの大きな期待（割合）を認識している子どもたちは、その期待に応えるべく、また自らの希望も含めて内発的動機付けがあり、そのことが結果に結びついているため、母親たちはそれほど促進行動をとっていないという関係性が示唆される。

勉強への期待割合と促進行動について、これも子どもへの期待割合の高さと促進行動の多さが比例していないが、期待する割合が「0」「1」の場合は、促進行動が有意に低かった。期待割合が低く促進行動が少ないことに加えて、子どもに期待する割合が高くても、実際に子どもが日々努力して勉強している場合や、外部（勉強の場合、塾や家庭教師など）に委託している場合などは、促進行動自体が減少するのではないかと推察される。

最後に、IVの5で学齢別にみた子育て肯定感に影響を与える要因について考察したい。

教育関心が高い母親は子どもに勉強や生活自立を促す傾向がみられ、子どもが中学生以上の場合、子どもの勉強実践が高いほど母親の子育て肯定感が高い結果がみられた。これは中学生からは定期試験が行われ、子どもの学力や到達度が目に見える形で現

れることから、教育に高い関心をもつ母親たちが、子どもと接していた結果や学習を促してきた結果を点数という形で評価と結びつけていると考えられる。神戸新聞(2022)の特集では、特に母親たちの中で子どもの成績が話題になることがあると示されており、高校受験などを前にして、これまで担ってきた役割の結果が子どもの勉強実践にあらわれるのではないかと気にする母親が多いことがうかがえる。

ところが、高校生以上の子どもをもつ母親のパス解析結果をみると、勉強実践から子育て肯定感への有意なパスはひけたものの、それ以外のパスは少なくなっている。これは、高校生以上の子どもを持つ母親の場合、子どもがどのように育ったかというところに自分の今までの子育てを振り返り、それによって肯定感が変化する要因となるとも考えられる。

花形(2009)が、大学生になり一人暮らしを始めた子どもをもつ母親へのインタビューで示した、子どもから感謝の手紙を渡された母親Cが「これは初めてもらったから、嬉しくって。こんないい子にそだってくれて。私、子育て成功！！って思いましたよ。」という語りにあるように、親への感謝の気持ちなどを表現できる子どもの行動によって、子育て肯定感が高められるということもあるだろう。本研究は一時点での調

査であることから、回想などを含まずに現時点での促進行動や子どもの実践などを尋ねたため、子育ての肯定感に大きく影響している出来事等を追うことができず、従属変数を説明する変数が非常に少なくなったという限界がある。そのため、今後は一時点ではなく継続的な調査などにより、母親の役割移行と子育て肯定感の関係性を検討していく必要があるだろう。

しかしながら本研究において、母親役割のうち「子どもの生活自立」「子どもの学業」「子どもの習い事など」を期待する割合が子どもの学齢によって変化すること、そしてそれらを促す行動が子どもの実践に影響し、さらに中学生以上の子どもの勉強実践が母親の子育て肯定感に影響を与えることを示すことができたことは意義があるといえよう。

今後の課題としては、先に挙げた継続的調査のほかに、今回の調査では母親役割を代替し縮小させるサービスの利用を変数に含めようと試みたが、それらサービスの利用は子どもの成長につれて減っているため、母親にとって必要なサポートをさらに丁寧を示す必要があることも挙げておきたい。今後は質的研究を通して、母親の子育て肯定感を高めるために必要なサポートなどを明らかにしていきたい。

引用文献

ベネッセ教育総合研究所, 2024「第7回 習い事・学習塾について考える その1 習い事の実態」
https://benesse.jp/berd/special/datachil/d/comment07_1.html

ベネッセ教育総合研究所, 2022「第6回 幼児の生活アンケートダイジェスト版 [2022年]

https://benesse.jp/berd/jisedai/research/detail_5803.html

(2025年1月17日閲覧)

土肥伊都子・広沢俊宗・田中國夫, 1990「多重な役割従事に関する研究—役割従事タイプ、達成感と男性性、女性性の効果」『社会心理学研究』5 (2), pp.137 - 145.

藤後悦子・井梅由美子・大橋恵, 2017「チームのネガティブな人的環境が小学生のスポーツモチベーションに与える影響」『モチベーション研究』6, pp.17 - 28.

濱田維子, 2005「仕事と家庭の多重役割が母親の意識に及ぼす影響」『日本赤十字九州国際看護大学 intramural research report』3, pp.147 - 158.

花形美緒, 2018「子どもの生活自立をめぐる母親の役割移行」お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 博士(社会科学) 学位論文

花形美緒, 2009「子どもが家を離れた後の母親の生活変化について—イベントに対する変化とその対応についてのヒアリング調査を通して—」『Proceedings : 格差センシティブな人間発達科学の創成 = Science of human development for restructuring the "gap widening society"』8, pp.143 - 150.

柏木恵子, 2003『家族心理学—社会変動・

発達・ジェンダーの視点』東京大学出版会、神戸新聞特集, 2022「子どもの学歴は自分のステータス」と言われ絶句…高校受験めぐり、ママ友グループは「マウント合戦」で大混乱

<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/omoshiro/202205/0015282284.shtml>

(2025年1月16日閲覧)

中村壽志・大森圭貢・下田栄次・坂上昇, 2022「知識構成型ジグソー法による学習と動機付けの変化—理学療法士国家試験の学習における成績層ごとの特徴—」『理学療法科学』37 (5), pp.489 - 494.

及川留美, 2014「『母親』の役割取得における省察の構造化—子育てにおける語りに着目して—」『東京未来大学研究紀要』7, pp.31 - 42.

総務省統計局 令和2年国勢調査 人口等基本集計結果

https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2020/kekka/pdf/outline_01.pdf

(2025年1月16日閲覧)

田間泰子, 2022「妊娠・出産・子育て 3 現代日本で子どもをもつということ—なぜ子どもをもつのか」『問いからはじめる家族社会学—多様化する家族の包摂に向けて』改訂版第6章3節, 有斐閣ストゥディア, pp.156 - 161.

天童睦子・多賀太, 2016「『家族と教育』の研究動向と課題—家庭教育・戦略・ペアレントクラシー—」『家族社会学研究』28(2), pp.224 - 233.

寺園さおり・山口桂子, 2015「子育て期母親役割尺度の作成」『小児保健研究』第74巻 (4), pp.491 - 497.

薦島修治，2020「中高生の教育期待形成における父母の期待の相対的重要性」『教育社会学研究』第 107 集，pp.111 - 132.

若本純子，2013「母親としての自己効力感一尺度の作成と信頼性，内的・外的妥当性の検証一」『家族心理学研究』第 27 卷(1)，pp.16 - 28.

本研究は、2021～2024 年度科学研究費基盤研究（若手研究）「母親役割の段階的移行において必要とされる資源的サポート」（課題番号 21K13415 研究代表者 花形美緒）の研究の一部である。

（はながた みお、本学科助教）